

平成四年二月二三日(日)

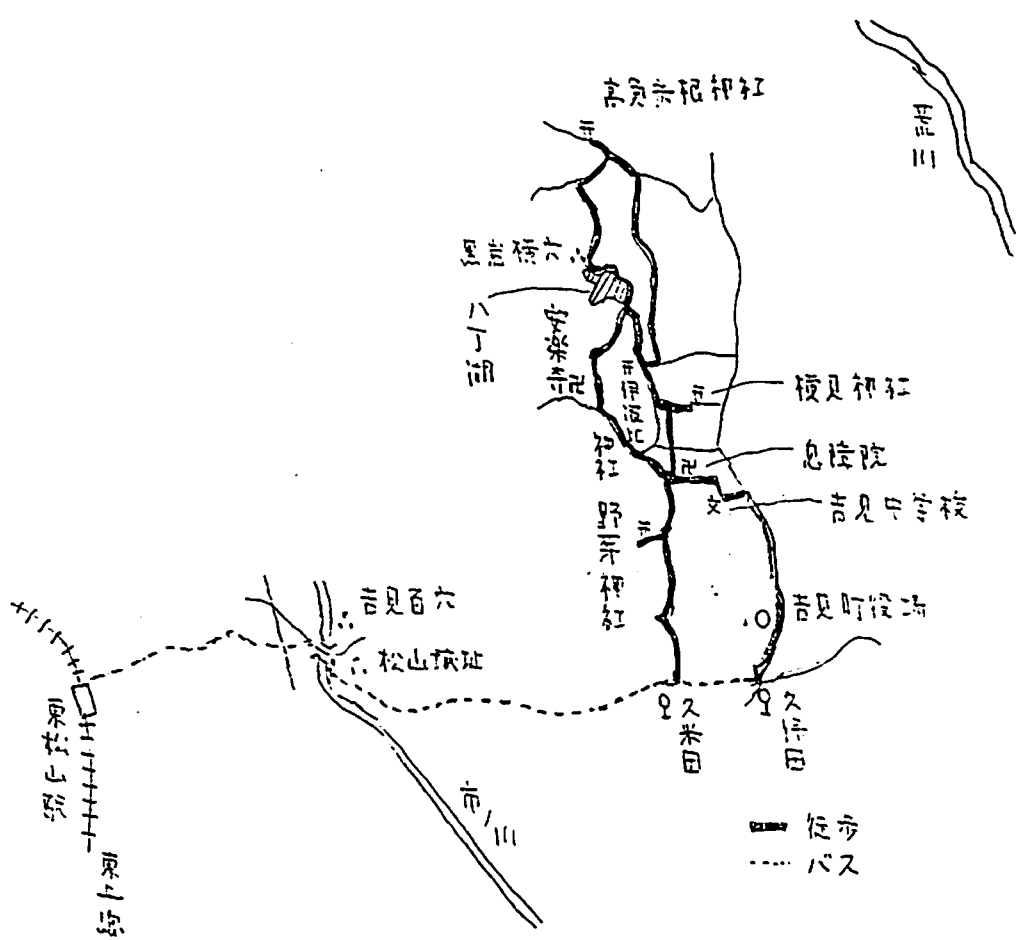
第一八九回 史跡めぐり資料

黒岩横穴墓群 吉見観音

謎の数 めぐりめぐって

3
<hr/>
43
16
11
<hr/>
33
1
<hr/>
3

越谷市郷土研究会



☆第一八九回史跡めぐりご案内
黒岩横穴墓群、吉見観音

とき 平成四年二月二十三日(日)

集合 南越谷駅前 午前八時

コース 南越谷駅―(武蔵野線)―北朝霞駅―朝霞台駅
―(東武東上線)―東松山駅―(東武バス)―

久米田：野芽神社：横見神社：伊波比神社：高

負彦根神社：黒岩横穴墓群：八丁湖：吉見観音

・安楽寺：息障院：久保田―(東武バス)―東

松山駅―(東武東上線)―朝霞台駅：北朝霞駅

―(武蔵野線)―南越谷駅

：印は徒歩

会費 三千五百円

案内者 幹事 宮川 進

しきないしや、式内社「延喜式」卷九・卷十の、いわゆる「神名帳」(「神名式」)に登載されている神社のこと。詳しくは延喜式内社というが、一般に式内の社(しきないのやしき)・式内社、略して式内・式社という。また、「神名帳」に登載されない神社を式外の社(しきげのやしき)・式外社(しきげしや)、略して式外という。「神名帳」の冒頭に「天神地祇惣三十一百卅二座、社二千八百六十一処、前二百七十一座、大四百九十二座、三百四座並預折年、月次、新嘗等祭之案上官幣、就中七十一座預相嘗祭」、一百八十八座並預折年國幣二、小二千六百卅座、四百卅三座並預折年案下官幣二、二千二百七座(並預折年國幣二)とあるように、全国五畿七道に散在する天神地祇、すべて三三三座を登載してある。上記で、「座」とは神座の意で、「社」に二座以上の祭神を祀る場合もあるが、一座の場合は社名だけを記してある。「処(所)」は社の所在数を示し、たとえば諏訪大社のように一社で上社・下社と二社ある場合は、一社二座という。次に、「前(まえ)」とは、祭神が二座以上有的时候に、主座のほかをすべて「前」という。また、「大」は大社、「小」は小社の意で、これらは神祇官の祭る官幣社と国司の祭る國幣社とに分かれる。奈良時代ではすべて神祇官より官幣が奉られる規定であったが、平安時代初期の延暦十七年(七九八)以後は國幣も行われるようになり(類聚國史)、官幣社・國幣社ともに官社と称した。大社は四九二座(社数三五三所あり、うち官幣大社が三〇四座(社数一九八所)、國幣大社が一八八座社数一五五所)ある。小社は二六四〇座(社数二五〇八所)で、うち官幣小社が四三三座(社数三七五所)、國幣小社が二二〇七座(社数二一三三所)あり、式内社の三分の二以上を占めている。官・國幣社とも名神祭に預かるのは大社

式内社分布一覽

		官幣大社	官幣小社	國幣大社	國幣小社	合計
宮中 京畿 五畿内 東山 北山 南山 西	中内道	30	6			36
	畿内道	3				3
	畿東道	231	427			658
	畿南道	19		33	679	731
	畿西道	5		37	340	382
	畿北道	1		13	338	352
	畿南道	1		36	523	560
	畿西道	4		12	124	140
	畿北道	10		19	134	163
	畿南道			38	69	107
	合計	304	433	188	2207	3132

(社数二二四所)あり、そのうち官幣の名神大社が二二七座(社数七七所)、國幣が一七九座(一四七所)ある。官幣大社はいずれも案上の官幣に預かる。名神祭に預かる官幣大社で折年・月次・相嘗・新嘗に預かるものは五五座(社数二二所)、折年・月次・新嘗に預かるものは七二座(社数四六所)ある。官幣大社で名神祭に預からないが、折年・月次・相嘗・新嘗に預かるものは二六座(社数一〇所)、折年・月次・新嘗に預かるものは一六一座(社数一一一所)ある。官幣大社は五畿内を主として諸道に散在するが、西海道には所在しない。官幣小社は折年祭に案下の官幣を受け、五畿内に限られて所在する。國幣社は小社とも畿外に所在し、折年祭の國幣に預かる。その品目や数量は社格に応じて相違がある。「神名帳」上(巻九)には宮中・京中・五畿内・東海道の

件に預かるものは二六座(社数一〇所)、折年・月次・新嘗に預かるものは一六一座(社数一一一所)ある。官幣大社は五畿内を主として諸道に散在するが、西海道には所在しない。官幣小社は折年祭に案下の官幣を受け、五畿内に限られて所在する。國幣社は小社とも畿外に所在し、折年祭の國幣に預かる。その品目や数量は社格に応じて相違がある。「神名帳」上(巻九)には宮中・京中・五畿内・東海道の

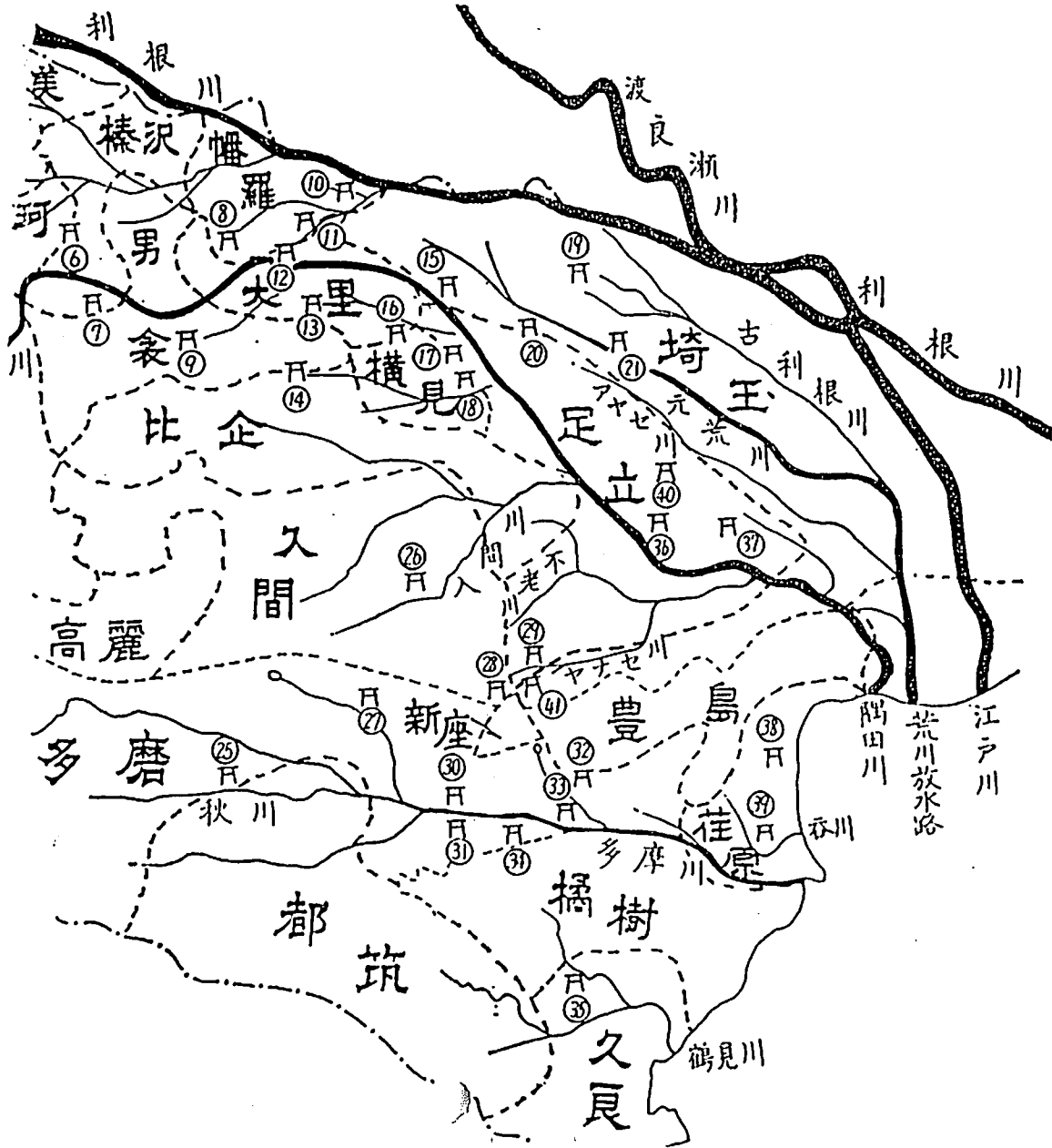
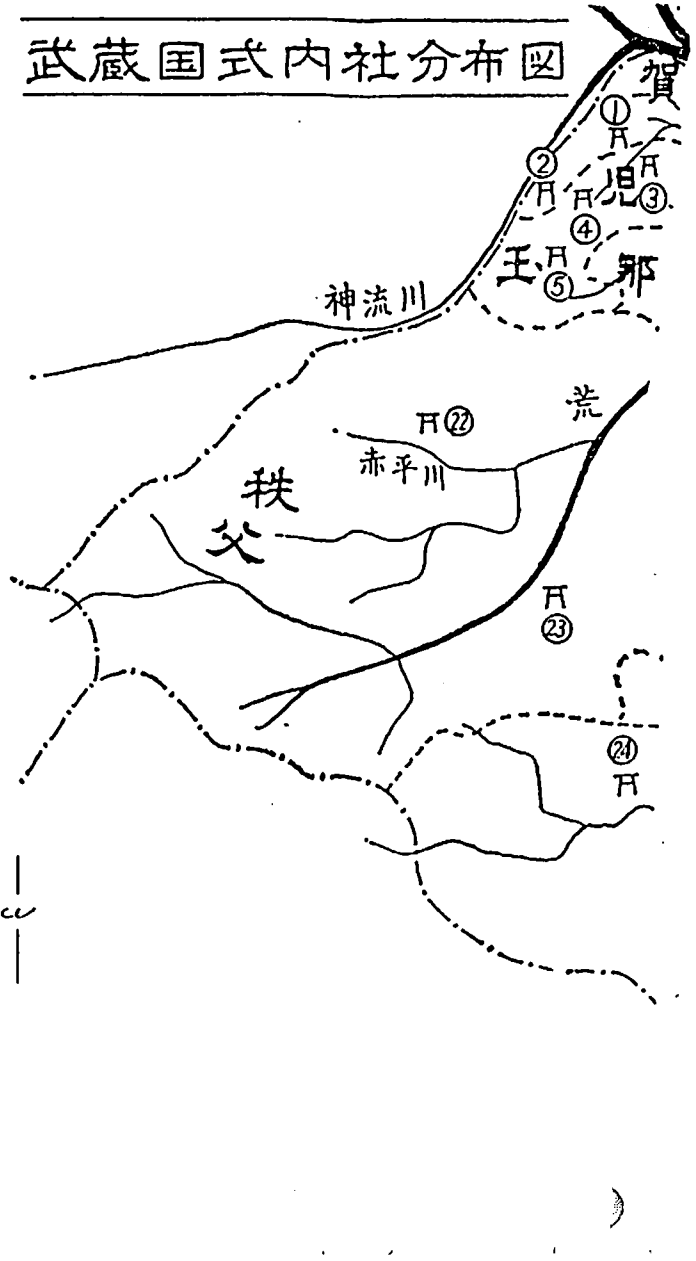
武蔵国式内社一覽

以下のとおり、43の神社がのせられている。

① 長幡部神社	⑩ 高負比古社	⑳ オマトツノ神社
② 稲実池上社	⑪ 伊波比神社	㉑ 虎柏神社
③ 稲実荒御魂神社	⑫ 横見神社	㉒ 布畷天神社
④ 今城八坂稲実神社	⑬ 玉津神社及官目神社	㉓ 穴沢天神社
⑤ 金佐奈神社	⑭ 前玉神社	㉔ 杉山神社
⑥ ミ力神社	⑮ 夕ヶヒメ神社	㉕ 足立神社
⑦ 稲乃売神社	⑯ 棕神社	㉖ 調神社
⑧ 榎山神社	⑰ 秩父神社	㉗ 磐井神社
⑨ 小坂神社	⑱ 青渭神社	㉘ 神田神社
⑩ 白カミ神社	⑲ 阿伎留神社	㉙ 永川神社
⑪ 奈良神社	⑳ 広瀬神社	㉚ 中氷川神社
⑫ 田中神社	㉑ 阿豆佐味神社	
⑬ 出雲乃伊波比神社	㉒ 出雲イハヒ神社	
⑭ 伊古乃速御玉比売神社	㉓ 物部天神社及国淵地神社	
⑮ 高城神社	㉔ 小野神社	

神社を(同下(巻十)に)東山道・北附近・山陰道・山陽道・南海道・西海道の諸社を登載してある。なお、式内社と推定されるものが二社以上存在し、いずれか決定しがたい場合、それらを論社という。

武蔵国式内社分布図



横見郡

三座

明治二十九年
比企郡ニ合併

【概観】横見郡は松山町の北にある二里四方の小郡であるが、水流三面を囲み、田野が広く、連なっている。有名な百穴のある吉見丘陵を、北から東にかけて吉野川（和田吉野川とも）が南下し、西からは、滑川と市川が平行して東流している。横見は横河と同義（注し）で、丘陵の三面の河を指した名称であろう。安閑紀の横湊はこの横見にあたるが、上古は右の諸川の造った沼が多かったからである。しかし、この河はまた多くの自然堤防を造ったので、古代の農民はこれに拠り、沼の芦を除き、干拓して、奈良時代までに広い美田を造成した。ところが、平安中期には、この横見郡は吉見郡と改名されている（『和名抄』与古英今）（注し）。しかし、それは、北から東にかけての広い平野を指していることは、吉見村がこの地帯にあり、ここを中心に東西南北の吉見村に分かれていることよって知られる。これによつて、古代の横見郡もまた、この農村の多い吉見村を中心とし、吉見丘陵を含む地帯であったことは当然である。したがつて、郡も式社もこの方面にあるはずであるが、『和名抄』には高負・御坂・余戸の三郷だけで、横見郷はない（注し）。今日では、北部平野が高負郷で、田甲に高負神社があり、山麓の東側に沿う農村が御坂郷で、黒岩に伊波比神社があるとの説はほぼ定説となっている。

(注) (1) 横見の見は甲頰の弥で、水と同音同義である（伏見＝伏水）。されば、横見は吉見丘陵の横の河という意味となる。

(2) 吉見の吉は昔が惡しに通ずるので、これを忌み吉見を吉見としたのである。

(3) 横見郷は『地理志料』明治三が始めて特設したが、その村落は御坂郷とダブル所が多く、横見神社も同様で、氏子区域と鎮座地ははなはだ不明瞭で信領し難い。しかし、特設した見解は多とすべきである。

一 横見神社

祭神 須佐之雄命か大己貴命

祭日 九月十五日 社格 郷社

所在 比企郡西吉見大字御所

【新考】『風土記稿』は、横見神社は横見郡七ヶ村の総鎮守と記しているから、江戸時代には郡全体から崇敬されていたことがわかる。

現在の横見神社は黒岩の伊波比神社から約四百メートルの田の中に鎮座している。小川に梁した太鼓橋を渡ると、



図-9 吉見郡和名村の野芽神社（横見神社）

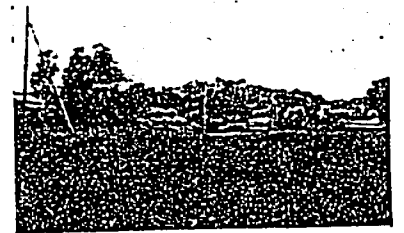


図-10 和名村の野芽神社(丘)を東より望む



図-11 野芽神社の丘を東南、横見川下流より望む

一千メートル程の社地があり、森の中に小社が建っている。

この外に境内の古墳の上に小社があるから、もとは式社がこの上にあつて、被葬者が祭られていたかも知れない。古墳はくずれているが原型はもっと大きかったに違いない（これは菱沼氏の現状報告である）。

しかし、この神社は『風土記稿』の上細谷村飯玉氷川明神にあたるもので、黒石の伊波比神社とは四〇〇メートルで余りに近すぎる。また隣の御所村は元禄以前は黒石村内であつたから、前同様の理由で横見神社でないと思われ。この上細谷の（黒岩のうち）飯玉氷川明神を横見神社といったのは、明治になつてからであるらしい。

私は仲田晴之介君の発見された、和名村の野芽神社が式内横見神社であると思う。次に彼の報告を述べる。

——和名村の野芽神社は高負比古神社（田甲・山の下）と伊波比神社（黒石）に続く吉見丘陵が少し低くなり、南に突出した丘の上にある。境内は杉の古木数本あり、全体としてコンモリした森で、その丘の下を横見川が流れている。和名の部落は広く、和名沼や学校前も含まれている。昔はワラブリキの神楽殿もあつた。船途、さらに遠くからこの丘を眺めると、関西なら式社がありそうな、古代村落の人々が仰ぎ見るような風景であつた（写真参照）。

五万の地図を見ると、和名は黒石の伊波比神社の南一キロにあり、南に久米田・南東に下細谷・加美（久米田）などの農村が連なり、いずれも上古の氏子部落であつたらしいことは一見明瞭である。したがつて横見郷はこれらの氏子の村々を含んでいたのであろう。

私はこの和名村の野芽神社を式内横見神社と確信するものである。野芽は野毛で、上野毛・下野毛と同義の語であらう（氏子代表に聞いたが、古い伝承は何も無かつたという）。

横見神社

神社の位置

黒岩の伊波比神社から約四百メートル東南にあたって、横見神社が鎮座している。吉見村上細谷の田のなかに東面して立っている。

古墳の被葬者を祀ったか

この小さな横見神社で注目しなければならぬのは、かつて当社の本殿が古墳のうえに位置し、もともとこの古墳の被葬者を対象として、祭祀が行なわれた形跡のあることである。古墳が円墳であったか、前方後円墳であったかはわからないが、現在は古墳の前方はとりくずされて、なかの石槨が露出しており、その石の上に小祠がまっつてある。古墳の上部や周囲も、いまは相当けずりとられて原型をとどめてはいないが、現状からいうと、高さ約二メートル、直径約六メートルである。もともっと大きい古墳であったらう。



横見神社

『新編武蔵風土記稿』をみると、「社の後に神木として囲り一丈五尺程の松あり、此の下に石槨ありと云ひ伝ふ」と記してある。その神木の老松は枯れたとみえて、もう立っていないが、その神木のものであらう、巨木を思わせる樹皮が横に立ってかけてあった。(四六頁の写真参照)

横見神社はその社名からすると、横見郡を代表する神社である。横見郡という郡は、明治二十九年まで存したが、その後は廃されて比企郡に合併され、現在の吉見村という一村に、大里郡大里村の南東端を合わせたものと、その範圍をだいたい同じくするきわめて小さい郡である。その建郡の始期ははっきりしないが、おそらく大化改新による国郡制の設けられて以来の旧郡で、以前は皇室に属した屯倉であったと思われる。笠原直使

主が安閑天皇のときに、朝廷に奉った四カ所の屯倉のうちの「横淳の屯倉」は、すなわちこのこととで、このミヤケが後に独立の郡として認められたのであろう。当社境内の古墳の被葬者は、横見の地がミヤケとなった初期のところに、朝廷のためにミヤケを管理していたものかもしれない。

横見郡の三郷

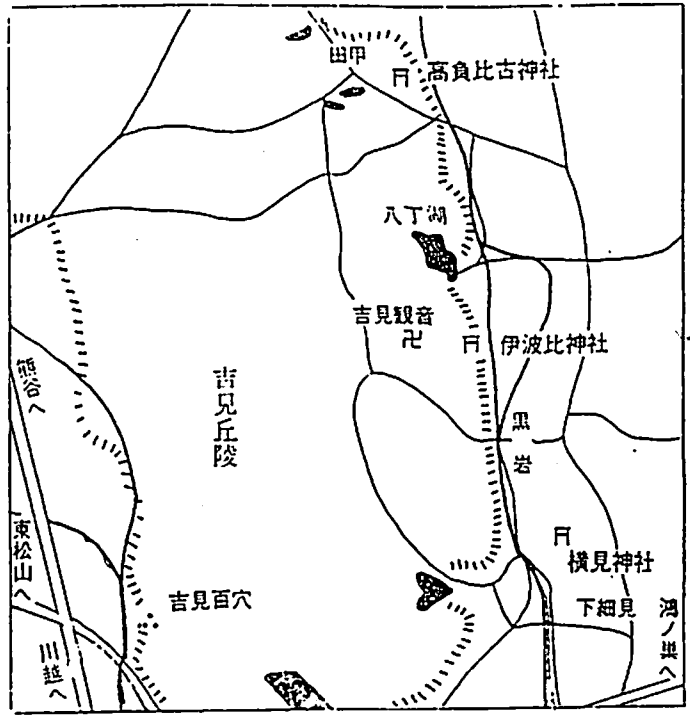
和名抄によると、横見郡には高生（タケフ）、御坂（ミサカ）、余戸（アマルベ）の三郷があった。そのうち高生郷は、田甲部落を中心とする吉見村の北部地方であることには、諸説が一致しているが、御坂郷のほうは判然としていない。思うに、黒岩、上細谷、

下細谷、久米田等の村々から吉見丘陵を上って、吉見観音にいたる坂道があるのを御坂ととなえ、その付近を御坂郷と称したのではあるまいか。また余戸は、吉見村の南部地帯で、江綱、前河内などの方面であろう。この南部地帯は、和田吉野川と市ノ川の合流地点に近く、しばしば氾濫をくり返したろうから、最もおそく集落ができたものと想像される。

吉見郡とも書く

なお横見郡は、中世以後よく吉見郡と書かれた。永祿の頃に記された小田原役帳にも、吉見郡とあり、また久米田村の慶長十七年の水帳、および正保四年の水帳にも吉見郡とあった。これは俗に、「横見」を好字にするために「吉見」と書き、当初はヨクミとよんだらしいが、それがいつしかヨシミとよまれるようになったのである。いまも「吉見村」の村名に残っている。

高負比古神社



吉見の式内三社付近図

社殿で、鄙びてはいるが、拜殿も本殿も、社務所（ただし今は人はいない）も、一応ととのっておる。神社の後方が高くなっており、そこに岩山があつて鋭い岩のいくつかが群ら立っている。その岩山の北側の崖の下は、約一七メートルで平低の地となつており、ゆたかな水田地帯である。この岩山の上から神社の反対の側を見おろした景観は、実にすばらしい。丘陵の下の田野や森が、春夏ならば緑の濃淡あざやかに、秋ならば紅黄さまざまに、ひろびろと展開している。

天理大学附属図書館所蔵の宝龜3（772）年の太政官符に「天平勝宝7（755）年の太政官符にある…横見郡高負比古乃社…」とかいてある。

田甲と高生郷

その吉見丘陵の北東の角に高負比古根神社がある。所在地は埼玉県比企郡吉見村田甲である。延喜式の高負比古神社だとされている。『和名抄』に横見郡高生郷という郷がある。その高生についてはタケフと訓むことが和名抄に注記されており、田甲もその転化したもので、田甲部落が昔の高生郷の中心であつたことが知られよう。

現在の神社

高負比古根神社は、田甲部落のなかでも最も古くからあつたと思われる農家の集まるところの北の端に、南面して鎮座している。茅葺屋根の

ぼんぼこ山

その岩山のなかで、神社の本殿の背後に近く、足を踏み鳴らすと、ぼんぼんと鼓のようにはびく岩がある。岩のなかが空洞になっていることは確かであるが、私は三度ここを訪ずれて、それが古墳であつて、なかに石槨が蔵されているのか、それとも自然にできた地質的現象なのかと疑っていた。ところが数年前に私がカナダを旅行したとき、ある公園でたまたま同じような岩石に出くわした。案内の人にいわれて、目の前の岩石を手でたたくと、ぼんぼんと音がしたので、さては比企郡の田甲の場合もやはり太古の時代、地球の皮殻に大変動があつた際に、

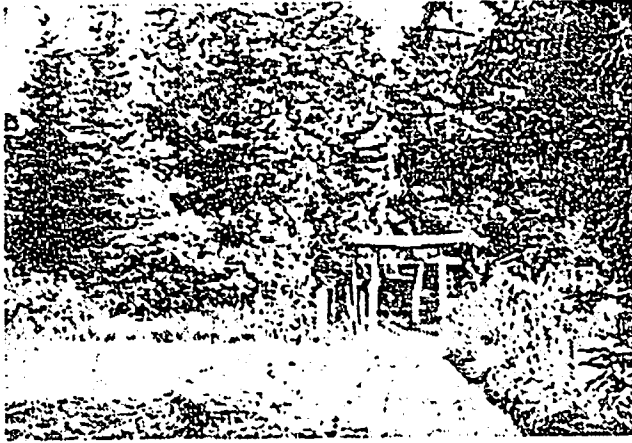
内部に空洞のある岩石が自然に生じたものと考えられるようになったのである。

中世から江戸末期まで、当社は玉鉾氷川明神と称せられてきた。これは、その岩を玉鉾石といい、山全体を玉鉾山といつたからであるが、現在は付近の里人は、一般にぼんぼこ山とかポンポン山とかとなえている。なお玉鉾の下に氷川明神とあるのは、おそらく中世になつて大宮の氷川神社を勧請合祀したためである。

祭神と地名

高負比古神社の祭神は、あじすまたかひこねのサキ味鉏高彦根命であるといふのが、通説のようである。なお素佐之男命

を祭神とする説もあるが、これは上述のように、当社が後世氷川神社を勧請合祀したから、その祭神と混同したものとと思われる。



高負比古神社

ところが伴信友は、当社が武生(タケフ)氏の祖神を祀つたものとの説をとなえており、『大日本地名辞書』などもこれにしたがつていようである。しかし一方において、社名をタケフヒコ神社というからには、タケフという村郷を代表する男神を祀つたもののように受けとれる。タケフは

竹生、すなわち竹原の意で、竹の群生する地と解することができよう。現にこの田甲部落には竹やぶが多く、またこの部落は後述のように、地下水が地下の浅いところに層をなして、水の豊富などころであるが、このような地には竹が多く群生することが一般的に認められている。そうすると、高負比古神社は、高生（タケフ）という地名から発生した社名であるというほうが、私には納得しやういように思われる。

鳥居横の方墳

当社の鳥居の前の向かって右手に、一つの古墳がある。高さ一・五メートルほど、周囲一五メートルほどの小さい古墳がある。今は雑草に蔽われてはつきりとわからないが、これは底辺が四角形で、古墳としては珍らしいとされている方墳である。また当社の氏子総代の老人に聞いたところによると、田甲部落のいまは畑となっている地に、戦前は古墳が十基ほどあり、そのなかにはかなり大きな二重の方墳があったという。方墳というのは、大陸系の古墳であるとされているから、帰化人系の人たちが古い時代に、この神社を祀ったもののように思われる。

当初の祭祀の対象は岩石か

高負比古神社の祭神は、タケフヒコで、高生郷の地霊を祀ったもののようなのであるが、そもそもの起原は、別に考えられる。終戦後間もない頃、私をはじめこの神社に詣でたときには、例の内部で空音のする岩の上に、一尺四方ほどの小祠が祀ってあった。昭和三十九年に三度目に私が訪れたときには、すでにこの小祠は存しなかったが、そもそも当社が祀られた当初は、たぶん前記の不思議なる岩石そのものを、驚異と畏敬の対象としてまつたということが考えられる。

地下水と農耕

現在の田甲部落の農家は、ほとんど吉見丘陵の上に居住している。そして丘陵の下に水田をもって稲作に従事し、屋敷の近くには畑を所有して麦を作ったり、桑

を植えたりしている。そして水田耕作に必要な水は、丘陵のなかにある池沼から流出してくる小川を主としているようである。吉見丘陵のなかは、地下水が地上近くまできているところが多いようだ。私がある農家の庭先の井戸をのぞいて見たら、地上から三分の一メートルほど下まで水がきており、つるべは使用せず、ひしゃくで水を汲みあげていた。だから、少し掘りくぼめれば、すぐ水が出るので、用水溜をつくるに適当な場所は、比較的容易に見つけられたであろう。この理屈は、田中部落の初めて拓かれた昔も変わりなかつたろう。というより、四辺森林に蔽われた当時としては、もっと水が豊富であつたらうから、この水を利用して、農耕が早くから始められたということも、じゅうぶん考えられる。

味高彦根命とは、父・大己貴命（おおなむちのみこと）と母・多紀理姫命（たぎりひめのみこと）の子で、父をたすけ国土を開拓した功績の高い神様である。

伊波比神社

黒岩という部落

田甲の高負比古神社から、南方二キロメートルたらず、吉見丘陵の麓に沿ってゆくと、黒岩という部落の北のはずれに、伊波比神社が鎮座している。神社か

ら四百メートルほど北に、吉見丘陵のふところに入りこんで、八丁湖という湖がある。以前は八丁池といっていたが、水面の面積が八町八反あるところからの名称だといひ、なかなか大きな池沼である。その池沼の底から水が湧き出るほか、丘陵のあちこちから流れこむ清水を集めているものと思われ、水は清澄で、堤には桜樹など植えて、公園風になっており、景趣に富んでいる。その八丁湖から流れ出る小川の水を利用して、黒岩の部落民は水田を耕作している。その八丁湖、立石という巨大な岩石が露出しているのが里道から望まれる。高さ約一〇メートル、その色赤黒く、黒岩という地名はこの岩より生じたといわれている。

神社の現在

伊波比神社は、黒岩部落を南北につらぬく村道に面して木の鳥居があり、それから六〇メートルほど西にあたって、ゆるやかな石段を五十階ほど上がったところに、三間四方の瓦葺きの社殿があり、拜殿と本殿と別々にはなっていない、ささやかな村社である。当社の位置からいうと、吉見丘陵の東側の崖の中腹に鎮座している。『新編武蔵風土記稿』を読むと「社地のさま老松生ひしげり、いかにも古き社と見えたり」と書いてあるが、いまは老松は一本も見当たらない。古木らしいものとしては、鳥居のかたわらに一かかえほどのモミの木があるくらいである。

岩の井

伊波比神社を最初に祀った人たちは、出雲祝氏の一族のわかれであろうということは、すでに出雲乃伊波比神社の項でのべておいたが、それにしてもその人たちが、どうしてこの吉見丘陵の崖の中腹に当社を祀ったのであろうかということ、私は疑問にしていた。ところが最近当社を三たび訪ずれ、社殿の背後にまわってみて、はじめて納得がいった。社後の崖は、一面の茶褐色の砂岩である。木や草に蔽われていない岩の部分は、高さ四メートル、幅七メートルもあるうか。そこから水がふつふつと泌み出ているのである。岩とはいえ岩質がやわらかく、しかも水をふくんでいるのであるから、指で圧してみると、へこむくらい弾力性がある。社後の崖の上の丘陵一帯は、いまはほとんど畑となっているが、昔そこが森林に蔽われていた頃には、この社殿のうしろの岩からは、もっともっと豊富に水が溢れ出たのであろう。この水は清冽で、しかもゆたかであったから、これを飲料水や農耕用に利用することによって、はじめて集落がひらかれ、生計がいとなまれた。その貴重にして神聖なる場所に、一族がその氏神を祭ったのではなからうか。当社は中世以来江戸時代にいたるまで、岩井八幡社と称せられた。この「岩井」は、その音からいってイハヒ（斎ひ）の転化したものではあろうが、岩から水の噴き出るところからいうと、まことに当社の特長にぴったりの社名であったというのほかない。

川の吉見百六より規模が上か
山の黒岩横穴墓群

対比される吉見と黒岩とで、いま、天下に有名なのは、もちろん吉見の方であるが、調査が行なわれたのは黒岩の方が先。明治10年、つまりモースが大森貝塚を発掘した年に地元の好古家・根岸武香らによって発掘されたのである。

古代への科学的な探求がこの時代に、この場所ではじまったことは科学的に特筆されるべきことであろう。

土地の人たちは黒岩横穴墓群を「十六穴」とよんでいた。これは根岸武香らが発掘した横穴墓が十六基だったことから生まれたのかもしれない。発掘終了後、根岸氏の案内で横穴墓を見学した内務省博物館の柏木貨一郎氏は明治11年4月、東京日々新聞に「黒岩村六居の記」と題して寄稿し、横穴住居説を展開した。

吉見百六を調査した坪井正五郎氏も住居説を説いたが、その前にすでに住居説があったわけである。

この明治10年の発掘の際、須恵器、鉄器、玉類などの遺物が出土した。

その後、昭和32年、44年の2回の分布調査により首切り谷、地獄谷（こわあい名前ですね）、茶臼山、松

崎などをふくめ、実は五百基近い横穴がある大横穴墓群であり、吉見百六より大規模ではないかと想像されている。

横穴墓の内容は吉見百六とは、あまり異ならないようである。ただし、細部は各横穴により多少のちがいはあつて、天井がアーチ状であるとか、半円形であるとか、間口が奥行きより長いとか、短いとか、棺座があるとか、ないとか、排水溝があるとか、ないとか……

こういうちがいは、葬られた「人」なり、「家族」なりの好みなのか、穴をつくった人の好みなのか。

市の川の清流をのぞむ明るい吉見と、しずかな緑にかこまれた山の中の黒岩と、同じ時代の地方盟主たちの中かでも死後の世界についての考え方にちがいがあつたのではないか。

あなたは、どちらのグループがお好きですか。

☆データ

所在 比企郡吉見町大字黒岩
形状 500基ほどの横穴墓群
年代 6世紀末から7世紀

古墳の年表

	埼玉・県内および関東地方の古墳	全国的な古墳	全国のおもき
弥生	3		
古	4	<ul style="list-style-type: none"> 堀古墳群 諏訪山29子 山の根 さき山 	<ul style="list-style-type: none"> ・翁巻古墳 ・橋井大塚山
	5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 野野神社 (38) ○ 諏訪山 (78) ○ (赤松) (75) □ 三笠宿禰神社 (22) ○ 宝来山 (100) ○ 獅子塚 (123) ○ 尾甲山 (100) 	<ul style="list-style-type: none"> ・菅田御廟山 (応神天皇陵) (125) ・吉備造山 (350)
時	5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 野本持早塚 (115) ○ 御母山 (42) ○ 野毛大塚 (50) ○ 不田天神山 (210) ○ 梅瀬台 (15) (石鳥羽遺跡) 	<ul style="list-style-type: none"> ・大山 (仙) (1) (徳天皇陵) (486) ・吉備作山 (286)
	6	<ul style="list-style-type: none"> ○ 内牧石塚群 大塚古墳のつくられた時期 ○ 小見兵衛寺天正山塚 (赤松) (1) (下れも100クラス) ○ 八甲巻山 (75) 国更の石舞台 	<ul style="list-style-type: none"> ・471 辛亥の年 ・507 雄略帝即位 ・538 聖明王即位 ・571 欽明帝元 ・593 聖徳太子 ・596 飛鳥寺
代	7	<ul style="list-style-type: none"> ○ 石舞台 ○ 高松塚 	<ul style="list-style-type: none"> ・藤ノ木古墳 ・石舞台 ・高松塚
	8		<ul style="list-style-type: none"> ・622 聖徳太子没 ・645 大化改新 ・672 壬甲の乱 ・708 武蔵より鉄 ・749 大化改新

さんじゅうさんしよかんのん 三十三所観音

観世音菩薩の像を安置する三十三ヶ所の霊場。三十三観音・三十三番札所ともいう。平安時代の末に畿内近傍に起つたが、巡礼が盛んになるにつれて各地に生じ、区別のため地方名を冠するに至つた。西国・坂東・秩父の三十三所観音が全国的な尊崇を得た。三十三の数は、観音が衆生救済のために三十三身として現われるとの「法華経」普門品の所説にもとづく。この三十三所を巡拝して観音の功徳にあずかることを願う風習の起源については、養老年間(七一七―二四)大和国初瀬寺の徳道に始まるとか、花山法皇が退位後、河内国石川寺の仏眼、書写山の性空らより霊場巡拝の功徳を聞き始めたとか伝えるが、確証はない。平安時代の中期には、伝統的観音寺院のほか多数の観音霊場が形成されるが、人宗僧の五台山などの聖地巡礼の影響を受けて、これら霊場を結ぶ形での聖・修験者の巡礼がみられ、後期になると貴族の間では七観音指が流行した。鎌倉時代の初期に成立した「寺門高僧記」・行尊伝所収「観音霊所三十三所巡礼記」・同覚忠伝には、三十三の霊場、および番数、寺宇の構造、観音の種類、願主等が重複記載されている。前者は嘉永二年(一一〇七)の銘をもつが真撰でないとの説がある。「千載和歌集」には覚忠の美濃谷汲寺で詠んだ歌を収めるので、彼が那智を起点とし三室戸寺で終わる三十三所巡礼を、応保元年(一一六六)にとけたことは事実である。両僧とも三井寺の出身であり、熊野・三室戸寺と三井寺との密接な関係より、寺門派修験の影響のもと、平安時代の末には成立していたと認められる。「拾芥抄」・「御産御折目録」・「塩養抄」などには札所番付を載せるが、一定していない。西国三十三所の呼称の文献上の初出は、康正元年(一一四五)成立の「竹居清事」で「博桑西州

三十三所巡礼」と、西国三十三所巡礼札の最古は応永十九年(一四二二)のものである。また東国からの巡礼を基準とした現行番付の初出は、明応八年(一四九九)撰述の「天陰語録」である。坂東三十三所の成立は、福島県東白川郡棚倉町八槻の都々古別神社蔵十一面観音台座銘により文暦元年(一一三四)以前に形成されていたと推察できる。各観音堂は平安時代の末期には造立されていたとの説もあるが、熊野信仰に伴う三十三所観音信仰の東国武士層への受容の結果であろう。初期は鎌倉幕府関係者と一部の修験者・僧侶に限られたものであった。「坂東」の二字が冠せられるのは、十五世紀後半からで、西国巡礼の民衆化と対応する。秩父三十三所は、坂東巡礼の民衆化に刺激されて形成された。三十二番法性寺に伝わる長享二年(一四八八)の番付表が最も古く、性空が「第一秩父巡礼、二番坂東巡礼、三番西国巡礼」と定めたのに始まるといふ。当初は曹洞宗寺院が過半数を占め、順帝は秩父地方の人びとの参詣に適したものであった。三十番法雲寺藏天文五年(一五三三)の納札に「西国坂東秩父各々所願札」とみえるが、天文以前に三十四所への改変があり、西国・坂東との一体性が強調されるとともに、地方性の脱却がはかられ、日本百所巡礼が成立した。江戸時代には洛陽・江戸三十三所が政治・文化の中心地の霊場として繁栄し、無名の地方霊場が数多くできた。治安の確立と交通機関の整備発達は、巡礼を容易にし民衆化した。同時に巡礼の行楽化を招いた。

坂東三十三所

番号	山号	寺名	本尊	宗派	所在地
一	大蔵山	杉本寺	十一面観音	天台宗	神奈川県鎌倉市二階堂
二	海雲山	岩殿寺	十一面観音	曹洞宗	逓子市久木
三	紙園山	安養院	千手観音	浄土宗	鎌倉市大町
四	海光山	長谷寺	十一面観音	真言宗	鎌倉市長谷
五	飯泉山	勝福寺	十一面観音	真言宗	小田原市飯泉
六	飯上山	長谷寺	十一面観音	真言宗	厚木市飯山
七	金目山	光明寺	聖観音	天台宗	平塚市金目
八	妙法山	星光寺	聖観音	天台宗	座間市入谷
九	都幾山	慈光寺	千手観音	天台宗	埼玉県比企郡幾川村西平
一〇	渡殿山	正法寺	千手観音	真言宗	東松山市岩殿
一一	岩殿山	安養寺	聖観音	真言宗	比企郡吉見町御所
一二	竹林山	慈恩寺	千手観音	天台宗	岩槻市慈恩寺
一三	金竜山	浅草寺	聖観音	聖観音宗	東京都台東区浅草
一四	瑞雲山	弘明寺	十一面観音	真言宗	神奈川県横浜市南区弘明寺町
一五	白岩山	長谷寺	十一面観音	修験本宗	群馬県群馬郡榛名町白岩
一六	五徳山	水沢寺	十一面千手千眼観音	天台宗	北群馬郡伊香保町水沢
一七	出流山	満願寺	千手観音	真言宗	栃木県栃木市出流町
一八	阿陀山	中禪寺	十一面千手観音	天台宗	日光市中宮町
一九	天開山	大谷寺	千手観音	天台宗	宇都宮市大谷町
二〇	松姑山	西明寺	十一面観音	真言宗	芳賀郡益子町益子
二一	松山	竹林寺	十一面観音	真言宗	茨城県久慈郡大子町上野宮
二二	妙福山	佐竹寺	十一面観音	真言宗	常陸太田市天神町
二三	佐白山	正法寺	延命観音	真言宗	三浦市芝岡
二四	雨引山	法華寺	千手観音	真言宗	真壁郡大和田村本木
二五	筑波山	大観堂	千手観音	真言宗	筑波郡筑波町筑波
二六	南明山	清浄寺	聖観音	真言宗	新治郡新治村小野
二七	飯沼山	円福寺	十一面観音	真言宗	千葉県鎌倉市浦馬場町
二八	滑河山	竜正院	十一面観音	天台宗	香取郡下総町滑川
二九	海上山	千歳寺	十一面観音	真言宗	千葉県千葉寺町
三〇	平野山	高安寺	聖観音	真言宗	木更津市矢那
三一	大慈山	笠置寺	十一面観音	天台宗	長生郡長町町笠置
三二	音羽山	清水寺	千手観音	天台宗	夷隅郡岬町岬根
三三	阿陀山	古寺	千手観音	真言宗	館山市那古町

番号	山号	寺名	本尊	宗派	所在地
一	那智山	青岸波寺	如意輪觀音	天台宗	和歌山縣東牟婁郡那智郡那智山
二	紀三井山	金剛宝寺	十一面觀音	天台宗	和歌山縣紀三井寺町
三	風尾山	粉河寺	千手千眼觀音	天台宗	那智郡粉河町
四	檜尾山	福井寺	千手千眼觀音	天台宗	大阪府和泉市檜尾山町
五	紫雲山	井寺	十一面千手千眼觀音	真言宗	藤井寺市藤井寺
六	壹坂山	南法華寺	千手千眼觀音	真言宗	奈良縣高市郡高取町邊阪
七	東光山	龜孟寺	如意輪觀音	真言宗	高市郡明日香村岡
八	壹山	長谷寺	十一面觀音	真言宗	藤井寺初瀬
九	明皇山	興福寺南円堂	不空明菩薩觀音	法相宗	奈良市登大路町
一〇	深雪山	三笠戸寺	千手觀音	修驗宗	京都府宇治市安道進賢谷
一一	岩間山	正法寺	准胝觀音	真言宗	京都府伏見区醍醐佛堂町
一二	石光山	石山寺	千手觀音	真言宗	滋賀縣大津市石山内畑町
一三	長守山	三井寺	如意輪觀音	真言宗	大津市石山寺
一四	新那智山	觀音寺	十一面觀音	真言宗	大津市園城寺町
一五	音羽山	清水寺	十一面千手千眼觀音	北法相宗	京都府京都市東山区泉涌寺山内町
一六	補陀落山	六波羅蜜寺	十一面觀音	真言宗	京都府東山区清水
一七	紫雲山	頂法寺	如意輪觀音	天台宗	京都市東山区櫻楓町
一八	靈龜山	行願寺	千手觀音	天台宗	京都市中京區堂之町
一九	西山	善峰寺	千手觀音	天台宗	京都市中京區行願寺門前町
二〇	香提山	穴太寺	聖觀音	天台宗	京都市西京區大原野小畑町
二一	補陀落山	總持寺	聖觀音	天台宗	亀岡市竹我部町穴太
二二	應頂山	勝尾寺	千手觀音	真言宗	大阪府茨木市總持寺町
二三	紫雲山	中山寺	十一面觀音	真言宗	瓦面市粟生間谷
二四	御旗山	清水寺	十一面千手觀音	真言宗	兵庫縣宝塚市中山寺町
二五	法華山	一泉寺	聖觀音	天台宗	加東郡社町平木
二六	青野山	円教寺	如意輪觀音	天台宗	加西市坂本町
二七	世野山	成相寺	聖觀音	天台宗	姫路市青野
二八	青野山	成相寺	聖觀音	天台宗	京都府宮津市成相寺
二九	青野山	成相寺	聖觀音	天台宗	舞鶴市松尾
三〇	磯金山	宝命寺	千手千眼觀音	真言宗	滋賀縣東淺井郡比叡町早崎
三一	磯結耶山	長命寺	十一面千手觀音	天台宗	近江八幡市長命寺町
三二	磯山	觀音正寺	千手千眼觀音	天台宗	蒲生郡安土町石寺
三三	谷汲山	華嚴寺	十一面觀音	天台宗	岐阜縣掛妻郡谷汲村徳積

番号	山号	寺名	本尊	宗派	所在地
一	通経山	妙音寺	聖觀音	曹洞宗	埼玉縣秩父市粉谷
二	大綱山	真福寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市山田
三	岩木山	常泉寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市山田
四	高谷山	昌昌寺	十一面觀音	曹洞宗	秩父市山田
五	小川山	長興寺	准胝觀音	曹洞宗	秩父郡横瀬村下郷
六	向陽山	卜雲寺	聖觀音	曹洞宗	秩父郡横瀬村前米
七	青苔山	法善寺	十一面觀音	曹洞宗	秩父郡横瀬村前米
八	青苔山	西善寺	十一面觀音	曹洞宗	秩父郡横瀬村根古屋
九	明星山	大明寺	如意輪觀音	曹洞宗	秩父郡横瀬村中郷
一〇	万松山	常慈寺	聖觀音	曹洞宗	秩父郡横瀬村十六区
一一	南石山	常栄寺	十一面觀音	曹洞宗	秩父市熊木町
一二	仏道山	野坂寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市野坂町
一三	旗下山	慈眼寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市東町
一四	長岳山	今宮坊	聖觀音	曹洞宗	秩父市東町
一五	母果山	少宮寺	十一面觀音	曹洞宗	秩父市番場町
一六	無量山	西林寺	千手觀音	曹洞宗	秩父市中村町
一七	実正山	定林寺	十一面觀音	曹洞宗	秩父市榎木町
一八	白道山	神門寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市下宮地町
一九	飛瀧山	竜石寺	千手觀音	曹洞宗	秩父市大畑町
二〇	法王山	岩上寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市寺尾
二一	雲光山	福音寺	聖觀音	真言宗	秩父市寺尾
二二	松風山	音泉寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市別所
二三	光智山	法泉寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市別所
二四	岩谷山	久昌寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市久那
二五	万松山	円融寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市下影森
二六	竜河山	大立寺	聖觀音	曹洞宗	秩父市上影森
二七	石竜山	鳩立寺	馬頭觀音	曹洞宗	秩父市上影森
二八	世戸山	長泉寺	聖觀音	曹洞宗	秩父郡荒川村上田野
二九	瑞竜山	法雲寺	如意輪觀音	曹洞宗	秩父郡荒川村白久
三〇	鷲窟山	觀音院	聖觀音	曹洞宗	秩父郡小鹿野町飯田觀音山
三一	鷲窟山	觀音院	聖觀音	曹洞宗	秩父郡小鹿野町飯田觀音山
三二	鷲窟山	觀音院	聖觀音	曹洞宗	秩父郡吉田町桜井
三三	延命山	法性寺	聖觀音	曹洞宗	秩父郡吉田町桜井
三四	日沢山	水滸寺	千手觀音	曹洞宗	秩父郡皆野町日野天

安楽寺三重塔

- ① 県・建造物 ② 昭28 ③ 吉見町御所 ④ 安楽寺

比企丘陵の一端、岩殿山安楽寺境内に緑に囲まれて聳え立つ朱の華麗な塔である。建立された年代ははっきりしないが、本堂の棟札によると、塔は法印杲鏡こうきやうが明暦年間（一六五五）以前に建立したと思われる。方三間の柿板葺き（現在は銅板葺き）で、高さは約一七・六尺ある。江戸時代初期のものとしては均整のとれた三重塔である。昭和三五年に解体修理したが、その際、相輪の基部から和鏡、銭、髪、麻などが発見されている。心柱は天井上の梁はりで支え、各層とも板唐戸、連子窓をもっている。安楽寺は観音様として地元の信仰も厚い。

☆県下で三重塔はほかに、◎西福寺（川口市）、◎成就院（行田市）にある。

安楽寺本堂

- ① 県・建造物 ② 昭52 ③ 吉見町御所 ④ 安楽寺

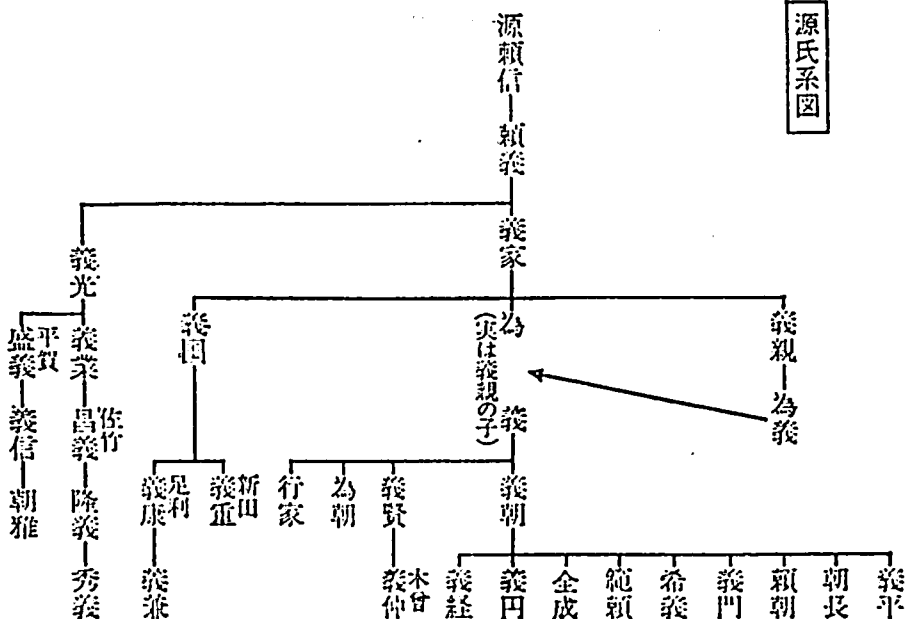
安楽寺は坂東札所の一番で岩殿山と号す。比企丘陵の一角、緑に恵まれた高所に位置する。本堂は桁行五間、梁間五間、寄棟造り、比較的大きな観音堂である。柱はすべて円柱で、周囲は高欄、宝珠柱をもつ縁が廻り、内陣に本尊一面観音を安置している。棟札ひなふたがあり、墨書銘で「寛文元癸丑年（一六六一）正月吉祥日、願主法印杲信、法印秀慶、巧匠大工岸上治兵衛、久保田重左衛門、小工池原重兵衛、□□藤兵衛、息障院住法印貞恵謹誌」とあるが、癸丑の年は延宝五年（一六七三）になるので検討を要する。本格的な密教様式の本堂（五間堂）で、江戸前期の貴重な建造物である。屋根はもと柿板葺きであったが、大正一二年に銅瓦棒葺きにしたという。

ミナモトノノリヨリ 源範頼(一二三)

源義朝の第六子。母は遠江池田宿の遊女で、同國蒲御厨で生れたところから蒲冠者と稱す。幼にして藤原範季に養はる。兄頼朝の兵を伊豆に起すに及び、往いてこれに歸し、治承五年小山朝政を援けて志田義廣を下野に擊ち、次いで壽永二年源義仲の頼朝と隙を生ずるや、弟義經と共にこれを擊ち、範頼は海道より勢多に向つて進み、敵を破つて義經と勢を合せ、義仲を攻めて近江粟津に殺す。次いで後白河法皇の範頼義經をして平氏を討たしめられるや、範頼等戦勝の勢に乗じて西下し、範頼は播磨路より一谷に赴き、義經は丹波路より三草山を経て一谷に向ひ、竝に攻めてこれを破り、平家は安徳天皇を奉じて海に泛ぶ。ここに於て範頼鎌倉に還る。頼朝その功を賞し、奏して範頼を従五位下に敘し、參河守に任ず。既にして頼朝再び範頼に命じて平氏を西海に討たしむるや、範頼八月二十七日京都に入り、追討の官符を賜はり、九月西海に發し、平行盛を備前兒島に破り、壽永四年(文治元年)二月赤間關を渡つて豊後に入つたけれども、兵氣振はず、糧食給せず、軍士の心一致せず、本國を慕つて逃げ歸るものが少くなかつたのを見ると、兵に將たる器で

はなかつたやうである。而も平氏の屋島に敗れ鎮西に奔らんと志を得ず、赤間關を越えるを得ず、遂に壇浦に亡びたのは、實に範頼の豊後に兵を擁せるがためであつた。併しながらこれ等の戦陣に於ける動功は到底義經の花々しいもの比ではなかつた。平家亡びるや頼朝義經和を失し、義經また亡ぼされたから、範頼懼れて深く身を慎み、事ごとに誓書を以て異圖なき陳じ、機に免れた。然るに建久四年五月富士の巻狩に當り、曾我兄弟夜討の事あるや、鎌倉に訛言あり、頼朝また害に遇ふと。政子聞いてこれを悲しむ。時に範頼留つて鎌倉を守りこれを慰めて曰く、範頼のあるあり、大變あるも深く憂となす勿れと。頼朝これを開き、その異圖あるを疑ふ。範頼誓書を以て百方辯疏すと雖も、遂に頼朝の心を解く能はず、伊豆修善寺に幽せられ、次いで殺さる。時に建久四年八月十七日である。その誅せられた所を、或は北條となし、或は金澤ともいふ。今通説によりて修善寺とす。(吾妻鏡 大日本史 花見)

源氏系圖



木造不動明王坐像 一 軀

平安時代—鎌倉時代

像高八〇・九

比企郡吉見町御所一四六 息障院

(昭29・10・23)

大同年間(八〇六—八二〇)、坂上田村麻呂創建と伝える息障院の本尊で、通例のごとく髪は巻髪、額や上に花飾をつけ、眼は天地眼、口に上下牙を表し、身に糸帛・裳をまとい、右手に剣、左手に絹索を持って右足上に結跏趺坐している。

本来、不動明王は大日如來の使者として真言行者を守護するため悪魔降伏の激しい怒りを全身に表す尊像だが、本像は怒怒の相も穏やかで、均整のとれたスリムな体型、細やかで美しい曲線を描く衣文線など典雅端麗な像容を示している。像の構造は楕形の良材を用いたやや不規則な木寄せとなっているが、大略は頭部部耳の前あたりで前後に二材を矧ぎ付け内割を施し、膝前部に横木一材、さらに両腰脇・両腕上膊・前膊・手先等の各部に別材を寄せ、頭部前面のみは首柄で体部に接合しているようである。

本像の伝来についてはこれまで諸説あったが、火焙光背裏の由來銘札により、江戸時代の享保年間(一七一六—一三六)に同院住僧の幸円・幸澄両師が、永年の素願により京都で探し求めた弘法大師真作と称する本像を迎え

て、享保九年秋に同院本尊としたことが明らかにされた。弘法大師真作はともかくとして、本像の洗練された出来映えは十二世紀末頃の京都の一流仏師の造立であることを物語っている。

(林)

範頼の館跡

① 泉・旧跡 ② 昭37 ③ 吉見町御所 ④ 息障院

源範頼は頼朝の弟である。比企地方には源氏関係の遺跡、伝説が多い。現在の息障院の地域が館跡といわれ、今も堀、土塁の一部が残っている。範頼、頼定、為頼、義春、義世と五代にわたって居住し、吉見氏を名乗った。義世は源氏を滅ぼした鎌倉幕府に反抗し、永仁四年(一二九六)執権北条貞宗に殺された。吉見氏の子孫が上田氏であり松山城主となっている。室町時代の明徳年間(一三九〇—一三九三)館跡に息障院が移り、今日に至っている。地名の「御所」は館のあったことからきていると思われる。地形も前方は湿地帯、背後に丘陵を控えるなど、自然の要害である。

ふどろーみようおう 不動明王 不動は
 阿チャラ Acala の訳。阿遮羅など音
 写する。アチャラナータ Accalanatha と
 もいい、阿遮羅囊多など音写する。詳し
 い起源は不明であるが、一種の山岳神のイ
 メージを仏教がとり入れ、如来の使者とし
 ての性格を与えたものとも思われる。大日
 如来の教令輪身で忿怒の相を示す。五
 大明王、八大明王の主尊。右手に利剣を、
 左手に羂索くわんさくを持ち、火生三昧に住す。
 不動とは菩提心大寂定の義であるといわれ、
 身から火焰を出すのは一切の障りや穢れを
 焼き魔敵を滅ぼして行者を守護し菩提を成
 就させる智を象徴する。一面二臂、一面四
 臂、四面四臂などの像があり、持物の異な
 る像もある。矜羯羅きんかろ(キンカラ Kinkara)
 童子と制吒迦ちやくか(チエータカ Cakka)童子
 を脇侍とし、眷属には八大童子(慧光けいこう童
 子・慧喜童子・阿耨達あうだつ童子・指徳童子・烏
 俱婆伽うくわが童子・清淨比丘・矜羯羅童子・制吒
 迦童子)、三十六童子があり、また俱利迦羅
 竜王など四十八使者があるとする。なお
 利剣に俱利迦羅竜王のまわりついた形が
 不動明王の象徴として作られることがある。



不動明王 (御室版胎成曼荼羅)

不動明王を中尊とする不動曼荼羅には仁王

經曼荼羅・安鎮曼荼羅などがある。この明王
 を本尊として疫病を払い、或いは延寿のた
 めに修する法を不動法といい、とくに家宅
 を鎮めるために修するものに不動安鎮法が
 ある。またこの明王の威徳によつて身動き
 できなくする法を不動金縛法きんばくほうという。
 像の身色によつて赤不動(高野山明王院蔵、重
 文)、青不動(京都青蓮院蔵、国宝)、黄不動(滋
 賀園城寺蔵、国宝、円珍が感得した異像で、これ
 を模した京都曼殊院蔵も国宝)などがあり、い
 ずれも絹本着色図である。その姿から帆不動
 (高野山蓮上院蔵、重文)、波切不動(高野山南院
 蔵、重文)の木彫像や走り不動(井上家旧蔵、重
 文)等が有名。また、東京都には目黒不動(目
 黒滝泉寺)・目白不動(目白新長谷寺)・目黄
 不動(小松川最勝寺)・目赤不動(駒込南谷
 寺)・目青不動(世田谷教学院)の五色不動が
 ある。不動明王の信仰は成田山新勝寺をは
 じめとして現在も盛んであり、修験道では
 とくに尊崇し、山伏の衣体は明王の尊像を
 かたどつたものである。国宝の尊像には前
 記の絹本着色図のほか、京都の教王護国寺
 に木造坐像があり、重文も数多い。なお、
 高野山金剛峯寺には国宝の八大童子木像が
 ある。(参考)空羂索神変真言經九、大日經疏一
 ○、底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法上、俱利迦羅
 大龍勝外道伏陀羅尼經、不動明王四十八使者秘密
 成就儀軌、聖不動尊安鎮家國等法、底哩三昧耶不動
 尊威怒王使者念誦法

不動明王は五大明王の中心的存在で、大日如来の使者となり、悪
 を断じ、善を修し、真修行者を守護する役割をになっている。しか
 し、本来的には大日如来の教令輪身で、如来そのものなのである。

像容は明王のなかでは唯一の1面2臂で、沙磤とよぶ花形の髻か
 蓮華を頭にいただき、非髮を左肩にたれ、猛炎をせおい、忿怒の形
 相をして、右手に利剣、左手に羂索をもち、忿怒座ないしは磐石座
 (一P.323)に坐るのがふつうである。本来は大日如来の化身なのだ
 から、蓮華座に坐る資格があるのだが、一格下の座に坐るのは、わ
 ざわざいやすい身分におとして衆生を救おうという意味であろう。

東寺(教王護国寺)講堂の不動明王像は、五大明王の一つとして
 つくられているが、日本最古のもので、不動明王の基本形を示して
 いる。しかし、この像は両眼をともにひらき、上の歯で下唇をかむ
 形を示し、のちの不動明王像とは異なる姿である。

参考図書

- 吉見の百穴 金井塚良一著 61・5 教育社
- 式内社の研究 第6巻 関東編 志賀剛著 59・5 雄山閣
- 武蔵の古社 菱沼勇著 47・3 有峰書房
- 神社祭神辞典 千葉琢穂著 58・4 展望社
- 埼玉文化財点描 柳田敏司著 53・2 さきたま出版会
- さいたまの名宝 91・10 埼玉県立博物館
- 新編埼玉県史 資料編4 58・3 埼玉県
- 日本人名大辞典 1938・10 平凡社
- 国史大辞典 60・11 吉川弘文館
- 総合仏教大辞典 87・11 法蔵館
- 歴史散歩事典 79・9 山川出版社